

卒業によせて……………	1
“留別の記”・退官に寄せる	2
人事異動……………	12

卒業によせて

教務部長 小林啓美



本年も1,500名余の新博士・修士・学士の諸君を世に送り出す時期となり、世界の科学技術界に新風を吹き込んでいただく事を念じながら修了生、卒業生に御祝いを申し上げたい。

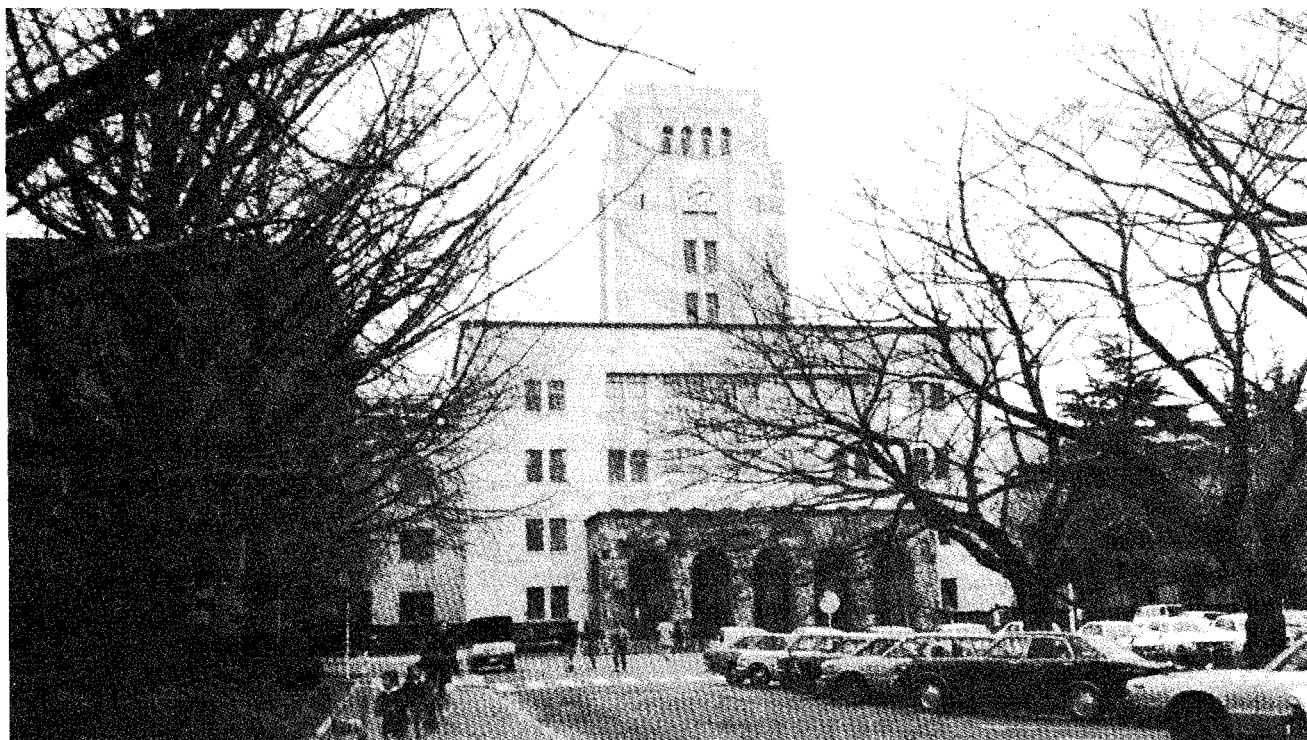
一つの集団の全体の価値の評価は種々の考え方がある。この集団のスペクトルを作ったとしてその評価を考えればよい訳である。このスペクトルの評価となるとその評価の目的によって変るが、1つの見方はそのそれぞれのピークの強さである。それぞれのピークが他の集団のスペクトルに比し如何に高いかを論ずればよい。この集団が日本でありスペクトルが科学技術の水準とすれば、他国に比し如何に優秀な研究が、如何に良い製品がという比較でよいことになる。しかしこのスペクトルの評価の方法はこれだけでは無いであろう。例えばスペクトルの谷を比較する事も重要な事であると考えられる。如何に一般的な水準が高いか、或は低い。一部の富豪階級の富は国全体の富の水準

ではなく如何に貧しい人が少ないかが国全体を動かしていく原動力であろう。すぐれた文豪が出て国民全体の文盲率が高くては決して文化的な国とは評価されない。又スペクトルのもつ面積の評価も重要であり、総合工業はこの様な評価によってその良否を問われるものであろう。

現代の科学技術の評価はまさにスペクトルのピーク値の評価からスペクトルの面積の評価に変わりつつある。境界領域の重要性もここに在る。蔵前の先輩は100年の昔よりこの点に力を入れて来られて今日がある様に私は感じている。

スペクトルのピークを伸ばすことも重要な問題であるが、スペクトルの谷をうめることも亦重要な作業である。それと同時にもう一つ考えていただきたいのは、個人の能力の限界であろう。上述の如きスペクトルの総合評価において全ての領域における協力なくして全体の評価は向上し得ないことも明白である。

若き修了生、卒業生諸君の相互の協力とそれぞれの分野における努力を切に希望するものである。



“留別の記”

本年もまた三月が廻り来たり、永年本学において、教育・研究にとり組んでこられた教官14名の方々が、ここに定年を迎えられ退官されることになりました。

広報委員会では定年退官されるにあたり、御挨拶や御感想、思い出などを綴っていただきましたので、ここに掲載致します。(掲載順不同)

在任中は、さまざまな思い出や御苦勞があったことでしょう。本学を去られるにあたり感慨無量のものがあるとお察し致します。

どうぞ、いつまでもお元気で御活躍されますよう、お祈り申し上げます。

なお、今度退官される方々は下記のとおりです。

小田幸康 理学部物理学科 教授

——退官に寄せる——

須藤六郎	理学部化学科	教授
平野 潤	理学部化学科	助教授
染野 檀	工学部金属工学科	教授
砺波宏明	工学部有機材料工学科	教授
西岡篤夫	工学部高分子工学科	教授
富田幸雄	工学部機械工学科	教授
佐藤和郎	工学部生産機械工学科	教授
矢島釣次	工学部一般教育等	教授
安倍 勇	工学部一般教育等	教授
池田朔次	資源化学研究所	教授
白井 隆	資源化学研究所	教授
吉岡 丹	工業材料研究所	教授
岩井津一	工業材料研究所	教授



二つの詩

吉岡 丹

数隻の海防艦に両側から護衛されて、輸送船団は米軍のマーチン哨戒爆撃機と潜水艦の来襲におびえながら、東支那海を一路南下していた。昭和20年の早春である。私は輸送船の船橋に立って、強い風に鋭く波頭を砕いている暗い海のうねりを見つめていた。老齢の船長は、ガダルカナルの海で魚雷は幾回となく回避してきたが、飛行機の爆撃を避ける自信はないと低い声で語りかけた。船倉には多くの兵が眠り、船底には巨大な特攻用魚雷が隠されていた。

云うなかれ 君よ 別れを
世の常を 生き死にを
海原の遙けき果に 今やはた何をか云わむ

あれから今日まで35年の歳月がたち、私はいつしか60代に足をふみ入れている。大木敦夫のこの詩を思い出すとき、東支那海の渺茫たる波濤は潮鳴りさえともなって、今も鮮かによみがえる。あの戦乱荒亡の中に燃焼した青春の影像是、ついに臉から消え去ることはないであろう。

阿川弘之の小説「雲の墓標」の最後にある“展墓”と題する詩。雲こそ吾が墓標 落霞よ碑銘をかざれとの遺書を残して、関東東方海上の米軍機動部隊に特攻攻撃をかけ、散っていった若き海軍予備学生士官の友への鎮魂の詩である。

われ この日 真南風吹くこの岬山に上り来れり

あわれ はや
かえることなき 汝の墓に 額づくべく
海よ 海原よ 汝の墓よ ……………

読み来ってこの詩に至るとき、私は流涕し酔っては鳴咽する。学業を捨て、父母弟妹や多くのなつかしい人々への思いを絶って征き、死んだ多くの友が私にもある。寮歌をうたうとき、親しい旧友と浅酌するときに、還らざる青春の日々が清潔な悲哀感をもって、この詩とともによみがえる。

今、歩いてきた道をふりかえって見ると、この二つの詩は時にきらりとした光芒を放ちながら、暗い影をひいて私についてきている感じである。そしてこれが事あるごとに、ある逡巡を私に強いつけてきたことを思わないわけにはいかない。そして私は多くの方々に迷惑のかけどおしであった。そのような私が本学において隠やかな日々を送り得たことに、本学の寛容を思い深く感謝したい。さて、これから人生の残照に向ってどう生きるか。林間に紅葉を焚いて酒を暖めるか、いや紅燈下に緑酒を酌まんそぞろ心もないではない。

最後に近作の拙詩を記して留別の意としたい。

帰帆一片下江流 客路花飛暮景遒
欲去残陽孤宿處 春風悵悵送離舟



移転・テニス・校長

染野 檀

はやいもので、本学にお世話になって32年、学生時代も含めると38年になろうとしています。

疎開していた名古屋の鳴海球場近くの鋳物工場で終戦を迎えるや、すぐ大学に帰り河上益夫先生のお世話になりました。最初の“まあ当分”の居室は、本館機械科、原正健先生の部屋で、小使のおばさんと共用しました。以後、分析化学横のバラック、窯業研究所、本館二階、三階と転々とし、昭和45年に現在の東棟に落ち付くまでの25年間に、約10回の引越をしました。

当時、余りに引越が多いので、これに耐える足腰の訓練の必要を痛感し、硬式テニスを始めました。テニス後のビールを旨くするためばかりではなかったのです。新図書館のある一角約3,000坪は、戦時中はイモ畑として食糧増産の一翼を担い、また食欲旺盛な学生の胃袋を満足させた貢献度は大きく、戦後はチューリップ、カンナなどの花畑として、殺伐とした学生、職員心を慰めてくれました。ここにテニスコートが造られ、津村利光、大田正樹、牧島邦夫、大戸敬二郎、中村孝義など主に本館在住の教官のほか、事務系の職員の方々と和気あいあい、しかも厳しい訓練(?)が始まり、実力をつけるため対外試合も大いにやり、それかと言って勤務中の午後3時、4時まで練習するような不勤慎なことは、そういつもではなかった。この頃が一番希望に燃えていました。何しろテニスの腕前は前途洋々、上達に疑問の余地は全くなかったのです。

事務棟の新築で職員コートがなくなり、新図書館・情報センターで学生コートの命運も尽きそうになりました。硬式テニス部の顧問を、津村利光、牧島邦夫両

先生から引継いでいましたので、加藤六美学長にだいふ駄々をこねましたが、立派な梅林コートが完成し、大変感激しました。これでテニス部が大学リーグ上位に進出してくれると両手に花でしたが、万事すべてがうまくはいかないものでした。

移転とテニス部の活躍とは私の能力には関係なかったのですが、最後は本職にも関係し、事は重大になってきました。“お前はどうも大学での勉強が足りぬ、高等学校からやり直してこい”と、川上正光学長に田町の工業高校の校長を命ぜられました。3年間の悪戦苦闘ののち、どうやらここの卒業できそうです。

研究生活に入っすぐ真空用材料の研究グループに入り、そこで大学のほか東芝、日立など民間企業の優れた研究者にも接する機会に恵まれました。関係する分野が真空技術、電子管材料でしたので、電子放射、半導体など私とは専門の異なる物理、化学、無機材料出身の研究者が多く、その発想法などに啓蒙させられました。その後、研究テーマは金属の高温表面処理、鉄鋼製錬反応、数年前からは二次イオン質量分析による表面分析など、興味のおもむくままに自由に楽しく研究を行ってきました。本学で過した半生は、正によい師、よい友、よい後輩に恵まれ、自由な雰囲気で行き届いた研究ができました幸福を心から感謝しています。

今、心から愛し、誇りとしている工業大学を卒業しようとしています。私は、新卒の若者のように胸をふくらませています。テニスを始めた時のように。

大学を去るに当り、お世話になりました教官、事務官の方々に厚くお礼を申し上げます。



退官にあたって

須藤 六郎

本学名誉教授故星野敏雄、名誉教授故佐藤徹雄、名誉教授大田正樹氏の後を受けて、伝統ある本学の有機化学の分野で微力ながら研究に教育にたずさわってまいりました。顧みれば本学へ学生として入学して以来、30有7年終始大岡山キャンパスで皆様に御気軽におつきあい頂き、暖かい家庭の雰囲気の中に過ごさせて頂きました。本当に御世話になり改めて感謝申し上げます。今本学を去るにあたり、戦争、戦後の混乱、旧制

から新制への改革、複数学部、大学紛争、長津田キャンパス等の出来事がつぎからつぎと走馬燈の如く思い出されてまいります。今日の大学が築きあげられたのは、学長を中心とする和の力によるものと思われまふ。この様な和の力により今後ますます本学が発展することを心から祈っております。終りに皆様の御健康を御祈りいたします。



コンクリートの壁の中で

安倍 勇

工大の常勤となったのが昭和26年で、この年は何百人と言う日本人がアメリカに留学した。就任早々まわりの同僚の理解で、その一員となった。これが実はその後の私の人生——従って当然工大での研究生活——をも決定することになった。BOLINGER 先生と名付ける当時は南加大学の音声学の権威が、無名の私の質問にいと丁寧な御返事を下され、以後先生の御指導で、この道を迷わずあるいて来た。工大ではコンクリートの厚い壁——すこし古びて薄いところもあるようだが——の中に、独りわがままをきめこんで、自分だけの道を歩んで来たと言うことである。退官に先立つ最後の年も就任当時のように今回は短かったがアメリカに立寄って、BOLINGER 先生とお会いした。約束の時間に先生の住むスタンフォードの町へ、サンフランシスコからバスで行って降りると、先生と奥様がにこにこ私を迎えて下さった。私はその時差し出された先生の手ほど温かく、ぬくもりの愛情と信頼と誠実とをふくんだ感触のするものを他に知らない。先生は誰からの通信物もみな大事に保有してあって、私のもファイルしてあった。「私が亡きあとは、こういうものがどうなるだろうかしら」と先生は微笑しながら

おっしゃる。一匹狼として三流のアメリカの学会に対抗し、やがてはそのアメリカの言語学会の会長になる実力者の先生の業績を日本の友人と共に1960年代に協力して一冊の本に編集して刊行したが、businessにならず、絶版となった。今年やっと先生への記念論文集がアメリカの2人の学者に依って編集され、出版された。世界の音声学研究者からの招待論文集で、嬉しいことに私もその一編に加えられた。実はこの本はやはり出版が難航し数年以上かかってやっとこすつとこ世に出た。私たちの作った1960年代の本にある先生のお写真と1980年の本の御写真を較べると、さすがにすこしお年を召されて見える。しかしこの2冊の本を眼の前にして眺めるのは私にはとても楽しい仕草なのである。一世代に近い長い期間、いわば工大のより重要であったかもしれぬ仕事により専念することなく、同僚の諸氏にどのように迷惑をかけているかもあまり気にせず、自分の道を歩いたことは、一つはコンクリートの壁があったためであろう。今度はこの壁から外に永久に出てゆく。壁の中ではBOLINGER 先生の一代記が作られたが、これから壁の外では何が私を待っているかまだ判らない。



浪花節は必要か

岩井 津一

思えば、昭和18年10月1日に本学の窯業研究所（工業材料研究所の前身）に助手として奉職して以来、37年の幾星霜が過ぎて本年4月1日に停年退官ということになった。いろいろな出来ごとがあった。やはり感慨無量である。

停年退官するということも一種の卒業である。日本語の卒業という言葉は何となく螢の光の歌唱を連想するようで感傷的であるが、しかし、これに相当する、英語のGraduateや独語のGraduierenという語の意義は積極的な新しい出発というニュアンスが強い。こう考えると大変元気がでてくる。

この卒業にあたって、永年教育、研究にたずさわったものとして、日頃感じている一端を述べさせて頂く。

それは、一つの哲理にしてもまた理論にしても、その哲理、理論それ自体が如何に優れたものであっても

それを多くの人がいろいろの分野で実証、証明し、さらにそれを多くの大衆に伝え広めなければ、その哲理、理論の本当の価値はない。若し、それが伝え広まらなければ、それらは単なる理論の哲理、理論の理論で終わってしまうことになる。例えば、物理学のアインシュタインの相対性原理にしてもまた地球科学のプレート・テクトニクスの理論にしてもそうであろう。こう考えると、一つのことをできるだけ多くの人に伝え広めることは、かりにそれらの紹介、解説が多少の厳密性を欠いたものであっても重要であり、かつ必要である。

浪花節という語を金田一京助監修の国語辞典で引いて見た。それには説経祭文から転化した、通俗的な語りもの……とあった。

やはり、浪花節は必要である。



恩寵に謝す

矢島 鈞次

窓外は春気爛漫、桜の花吹雪の中にある。教師が壮重さを失わないようにと背筋を伸ばして「少年老い易く、学成り難し。」と朗誦して、われわれに諄々と説く。初老の教師には、まごうことなく自己の実感からの話であつたろうけれども、希望に胸ふくらませていた中学生のわれわれには、観念的に、まして実感としてわかつた筈がない。教室には小さなざわめきが最前からあつた。そのときの教師のわびしそうな顔を今でも私は忘れることができない。

今、私自身が定年を迎えるに当って、不思議にも、中学一年のこの日の光景がまざまざと甦えてくる。少年老い易くというけれども、まさに瞬時の間であつた。学成り難し、脱帽するしかない。お前は何をなしたかと自問自答するだに無駄であり、むなし。

私自身、もともと大学での専攻は「中世カトリック経済思想」であつた。聖トマス「神学大全」を読み、ダンテ「神曲」に取り組むというより土足で踏みこむ毎日を送っていた。生田春月の「片隅の哲学」に共鳴してからは、黒子の気安さと退嬰性を身につけてしまったようである。そんなことで、言葉は適切でないが、世すぎのために何時とはなしに理論経済学などという性格に合わないものを開業する羽目になった。

京都育ちの私には、東京は魅力ある街であつた。と

くに昭和初期の下町のただすまいが私をとりこにした。久保田万太郎の作品や俳句に誘われるようにして、三筋町から雷門へ、駒形の「麦とろ」、「どじょう」の美味に酔つた。

北京での生活も忘れ難い。高木健夫氏のペン・ネームでの著作「北京百景」、「北京横町」を片手に、私は読書にあきると北京の大街、胡同を野良犬のように歩き回つた。私には古都とよべるものは北京しかない。西のはずれの宣武門沿いの城壁の下でいつも店を開いている占師に、ずばり、「成学の徒」ではなく「遊学の徒」と指摘されたことは忘れ難い。

文字通り私は遊学の徒である。郭華倫著「中共史論」の翻訳も残されているし、黒死病と十字軍からみた中世史の再構成、「新自由主義の政治経済学」の脱稿、李朝経済史の出版と領域にかかわりない仕事が出積している。私はとても定年を迎えられそうにない。棺を蓋うまでは。

東工大の先生がたや学生諸君にまで深謝している。心温まる配慮をいただいたことが私には痛いほどわかる。蔵前工業会員になる気になったのも、まさにこの点からである。

「めぐり会い」の恩寵にしみじみと謝したい。



退官にのぞみ

佐藤 和郎

退官にのぞみ二、三思い出を述べてご挨拶したいと思います。

私が本学に帰ってきたのは卒業して22年目の昭和40年の春でした。キャンパスに入って目をみはつたことは学生の頃まだ苗木であつたと思われる本館前のヒマラヤ杉が4階までとどくほどに大きく成長していることでした。そしてその姿に教育の原点と本学の発展をかい間見たことを今でも憶えています。

当時の教授会では議論が活発に行なわれ、その中に教官の停年に関する見直しの問題がありました。最終的には従来通りとすることとなりましたが、いま思えばそれは妥当な線であつたようです。その理由に、たとえば退官後私大に行くようなとき、普通満60才ならば正教授として迎えられますが、60才以上ならばその

ようにならない場合もあり、また心身のスタミナなどからみて、第二の人生のスタートとしては60才が適当と思うようになったからです。

私は学生に研究の目的はと問われれば、従来の定説を破ることにありと答え、また工業には文字が示すように「たくみなわざ」が必要であるとも説いてきました。しかし、それは紺屋の白袴というに等しく、私自身いまだそのような実績のないことを恥じています。幸い、在職中はよき先輩とよき隣人にめぐまれ、静かに学究生活を送ることができ、またここに停年を心豊かに迎えることができたことを深く感謝しています。

最後に本学の発展と皆様方のご健康をお祈りするとともに、今後ともご指導、ご鞭撻下さるようお願いする次第です。



長津田の金魚

白井 隆

長津田キャンパスで使用されている水道量の大半は、再生処理された、いわゆる“中水道”である。飲料水、洗面用、その他特殊な実験には横浜市水道局から買い入れた上水を使わなければならないが、それ以外の一般の実験用水、冷却水、トイレなどは、使用済みの廃水を再生処理して、中水道として循環使用しているわけである。

このためには、余分な中水道の配管を上水道と併設するので、工事費も高くなり、さらに廃水処理施設が必要で、国立大学としても、当時は前例のないことなので、その実現までには幾多の困難があった。歴代の施設部長はじめ関係各位の並々ならぬ御尽力の甲斐あって、現在、処理水の水質は、たとえばB.O.D.で2～3 p.p.m. という世界一きれいな水に再生されていて、全国から多数の見学者が訪れている

ところが、地元や横浜市当局からは、「もっと、実際に魚を泳がせてみて、処理水の安全なことを目で確か

たい。」という要望が出てきた。せっ角きれいにした水を、また魚の糞で汚すのは心配であるが、とも角、夜店で3尾百円ぐらいの小さい金魚を千円分ぐらい買ってきて、容量4,000トンの処理水調整池に放り込んだ。

それから一年余り経った夏の頃、水面を通してキラリと魚影が光るようになり、調べてみると、魚体数で推定300尾以上、平均体長も初めの2倍以上に成長していることが分かった。夏休み中のことで、近くの小中学生が釣竿をかついで群がってきて危険なので、急いで柵を張りめぐらすやら、危険防止の立札を増設するやらで、金魚代よりも遙かに多額の出費となってしまった。

普通でよく見受けられるガラスの金魚鉢の中ではこのような成長、繁殖は全く予想できないことであろう。やはり、長津田キャンパスのような広々とした良い環境からは、きっと^{おもしろ}大物が育つに違いないということ、身をもって感じた次第である。



退官にあたって

砺波 宏明

母校本学に奉職以来はや30年余、長いようで短い年月でした。学生として入学したのが昭和15年4月でしたから、戦時中と終戦直後を除くとして、大岡山生活40年の思い出であり、いま定年で大岡山を去るに当りまことに感慨無量なものがあります。

思えば、この30年、私の属した当時の繊維工学科は、旧紡織学科が改組された直後であり、それが昭和46年さらに有機材料工学科に改称されましたが、これはわが学科の変遷の歴史であり、とりもなおさずわが学科の発展の歴史でもありました。繊維工業は天然繊維から合成繊維に主体が移ったが産業的には高度成長の波にのり、それが昭和48年の第一次オイルショック以来急速に低落したわけですが、大学における“繊維工学”はもっと以前から新しい学問的基盤への改革確立に苦悩をつづけてきたように思われます。学生への不人気はともかくとして、職業教育としての紡織工学からいかにして近代的繊維工学に生れかわるかは我々教官の責務であったが、その繊維工学がさらに次の世代の若者にアピールすべく、引きつづいて改革され、昭和46年4月から材料を中心とした有機材料工学科へと発展してきた。これまでの道程を、30年を経た今日、なつかしく思い出す次第であります。有機材料工学科になったあともはや9年、ようやく学科体制も整ってく

るとともに昨年秋には新装成った新有機材料棟に入り、おそらくこれから次の新しい発展期がはじまることと大いに期待している次第であります。退官直前、新棟移転に間に合い、新しい発足をこの目で見て去ることができることは、何かしらわが学科発展のフルコースを体験できた満足感を感じる次第です。

またこの30年で最も印象強く思い出されるのは大学紛争です。昭和43年たまたま厚生補導委員となり、紛争勃発の当初から、学外拠点を走り廻った日夜、石川教務部長の下で副部長をつとめ団交に出た思い出など、終生忘れることのできない体験でした。この原稿を書かされている「クロニクル」も、その第1号を室田、稲田、当麻諸氏と徹夜で印刷したことがつい昨今のように思い出されます。

最後にこの3年、本学の留学生委員長を仰せつかり、お蔭でいくつかの海外大学と協定ができましたが、これは一重に委員各位の御協力によるものであり、深く感謝している次第であります。近年本学の国際学術交流が急速に発展しつつあり、今後益々本学が国際的に貢献し、名実ともに、世界の一流大学として発展することを心からお祈りします。

退官にあたり、齋藤学長はじめ、御交誼を頂いた本学各教官、事務官の方々に厚く御礼を申し上げます。



13年間の断想

西岡 篤夫

昭和42年1月に本学に御世話になってから早くも13年間たってしまい、停年を迎える事になった。多くの先生方や職員の皆様にご世話を焼いた事に心から感謝の意を表したい。ここに断片的であるが思い出すままにいくつか書いてみたい。

私は本学出身ではないが、亡父は明治40年に蔵前の応用化学科を、弟は昭和20年に化学工学科を夫々卒業しているので本学にくる事になったのもやはり縁があったのだろう。一昨年引越のため身のまわりを整理していたら亡父の卒業写真帳が出てきた。珍らしい写真が多いので百年史編集委員会に寄贈した。弟は藤田研出身で稲積教授と同期である。同教授には教育の面で有益な御意見をうかがう事が多く感謝している。

私の室は本館南面の旧図書館の西隣であった。日当りのよい室で年をとるほど有難く思ったが、着任後窓から見える建物が北棟とよばれるのを聞いてどうも納得がゆかなかった。そのうちにその南に南棟というのがあるのを知ってやっとのみこむ事ができた。

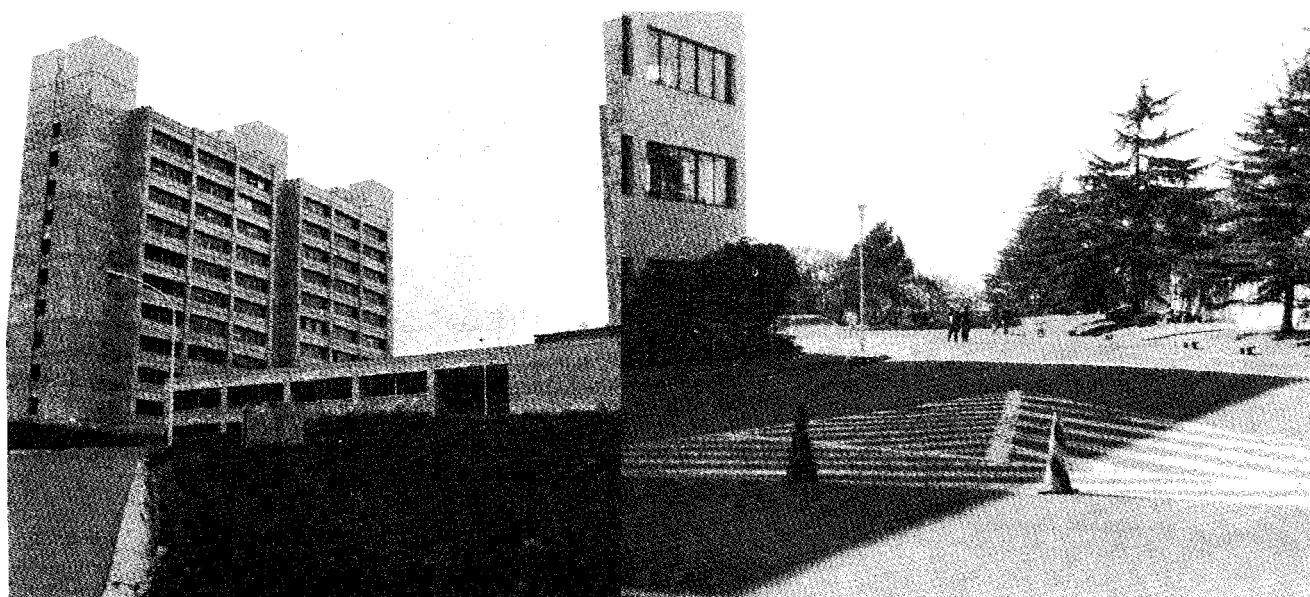
来てからまもなく学科主任の役がまわって来た。ある日の主任会議の時、学部長の浅枝先生に正門の近くに案内板をつくって下さる様お願いした。数年後コンクリート製の立派なものが守衛所に向い会ってできたのにびっくりもし、安心した。

工学部の授業は実験と演習に主体があり、講義はこれと時間的にも整合がよくとれたのがよいと思う。私は応用化学実験第四でNMRを担当した経験がある。僅か2日間のうち第1日に10~12名の学生を自室に入れ、1時間の講義のあと当研究室の装置で実験と演習

を2人組の交代で実施して宿題を課す。中1日おいた2日目にその宿題の解答を各自がグループ全員の前で説明する方法で5年位続けた。熱心な学生は難しい課題ほど意欲を示し、20枚もレポートを出す人もいた。これに反し別の授業でNMRを多くの時間をかけて講義したあとでテストしても、応化実験ほどの教育効果は得られなかった。5年間で約600名の応化系学生をこうして教えた事は、私にとって本学における最もよい思い出の一つである。

最後に学術情報処理について一言したい。本学には東大の大型計算機センターを利用するリモートステーションが設置されていないが、TOOL-IRの利用上是非この実現を希望する。また、音響カプラー付のTSS端末に対して加入回線を1本与え、総合情報処理センター或いは図書館でTOOL-IRその他のデータベースのTSS利用が可能になるとよいと思う。

終りに本学の教育・研究における一層の充実発展と教職員の皆様の御健康をお祈り致します。





退官に際して

小田 幸康

私はこの4月1日で本学を停年退官致します。それは私が本学教授に着任して以来満21年、また大阪大学を卒業して故菊池正士先生の助手にして頂いた時から満38年になります。この間、さほどの大過もなく一応教育研究の任を果せましたのは、大きく言えば国家社会の恩恵に始まり、諸先生や諸先輩、御同僚の皆様方、大学のいろいろな部門の方々の並々ならぬ御教示、御指導、御協力のお陰であり、厚く感謝致す次第でございます。また私が極めて浅学非才で乏しい指導しかできなかったのに反し、後輩学生各位は極めて優秀であり、その能力を発揮して様々な分野でよく科学技術の進展をリードし、見事な学術的成果を収め、あるいは収めようとされていることは驚くばかりです。その基盤となっている蔵前精神という言葉で表わされる本学の学風と共に、私の深く敬意を表する所であります。それと共に、本学並びに関係の皆様の方々の今後益々の御発展を信じ御清祥の程を心から念ずる次第であります。

いろいろ考えてみましても退官に際して申し上げることは以上で尽きます。それというのも、38年間にはいろいろの事があり簡単にまとめ難いからです。例えば本文最初に述べた研究生活入りを(1)中性子物理、同時に起った大事件を(2)太平洋戦争、以下(3)岡部金治郎先生の下で10cm電波の受信の研究、(4)終戦、核物理復帰、(5)核力、(6)阪大サイクロトロン建設に際し高周波部門担当、(7)陽子物理、

(8)東大核研サイクロトロン建設に共同建設として高周波部門応援、(9)共同利用研究、(10)工大転任……等と書くと、私の38年は大体(20)位でまとまります。現在では、例えば、(13)高エネルギー研や、(19)エネルギー貯蔵などに関係があります。

ところがこういうものや、他に番号だけの(20)、(21)などでも、番号の若い(1)、(2)、(3)、(4)、(5)、(6)等の事項を抜いては直ちに考えにくく、互いの関連が切れなくなっているのが面白く、また不思議であり、結局それが私自身の歴史というものにつながるようです。

その間、大きく国運や社会情勢の変移があり、多くの人々がほとんどそれに気付かずにその中を流されて行く。またその中を非力な一個人が漂って行き、周りの多くの方々が導き扶けて下さったりしている。一方では、立派な若い方々がそれと同じような方向にも動いて行くという状態で、今やある関門も見えてきたというところでしょう。

38年をこう扱った時、私のご挨拶は前記に尽きるのですが、若干付け加えさせて頂けば、まず停年の関門に到達し得た事は嬉しく存じており、次に幸い私は有難い第2の関門も示して頂いております。これまでより大部スピードは落ちるものの、依然としてこの歩みを続けてまいります。

本当に有難うございました。



昭和54年度手島記念研究賞授賞式開催！

昭和54年度手島記念研究賞の授賞式が、手島工業教育資金団の大久保理事を初めとする関係来賓を迎えて、去る2月25日（月）、創立八十年記念会議室において開催された。

同研究賞は本学の研究を奨励するために設けられているもので、研究論文賞、著述賞、研究奨励賞（博士論文）の三部門に分かれている。

当日、受賞者に対してそれぞれ賞状ならびに副賞が授与された。本年度の受賞者は以下のとおり。

手島記念研究賞受賞者一覧

イ．研究論文賞6件

部門名	受賞者	研究論文名	備考
理学部門	比企能夫 鶴岡富士雄	Ultrasonic Attenuation and Dislocation Damping in Helium Crystals	1979年発表
"	小沢正直	OPTIMAL MEASUREMENTS FOR GENERAL QUANTUM SYSTEMS	1979年発表
材料工学部門	有田 稔 染野 檀	Application of the Metal hydrogen Equitibration for Determining Thermodynamic Properties in the Ti-Cu System	1979年発表
応用化学部門	佐藤史衛	オレフィン類の接触ハイドロアルミネーション反応を経由する合成反応	1978年発表
"	白井 隆 石田 愈	傾斜樋を流れる固体粒子の速度分布	1979年発表
機械工学部門	池辺 洋 大内 英俊	運動量理論へ寄与（油圧と空気圧）	1977年発表

ロ．著述賞2件

部門名	受賞者	著書名	備考
電気・電子工学部門	小野田 真穂樹	基礎伝送回路	1976年刊行
社会部門	永井 陽之助	冷戦の起源	1978年刊行

ハ．研究奨励賞3件

専攻名	受賞者	博士論文名	備考
制御工学専攻	北川 能	油パイプラインにおける非定常流れに関する研究	1978年発表
電気工学専攻	国枝 博昭	分布定数回路網の集中素子等価表現とその応用に関する研究	1977年発表
電子物理工学専攻	大津 元一	赤外レーザーを用いた超高分解能分子ビーム分光装置の設計	1978年発表

学位(博士)授与者

前回（No121, 2月号）掲載分に引き続き、昭和53年度論文博士について掲載します。

授与者氏名、学位番号、学位論文は次のとおりです。

論文提出によるもの

昭和53年7月31日付授与者

工学博士

金子吉一：工第659号

熔融アルカリ塩化物中における遷移金属酸化物の溶解挙動

柴 公倫：工第660号

重水格子における置換法実験とその解析に関する研究

吉田 普：工第661号

熔融塩電解に金属トリウム製造の基礎的研究

安田嘉純：工第662号

レスポンス関数を応用した画質主観的評価に関する研究

昭和53年9月30日付授与者

理学博士

森 俊夫：理第153号

Theory of Point Processes and its Application to Limit Theorems

工学博士

向高祐邦：工第663号

攪拌槽による生物反応操作に関する基礎的研究

南谷 崇：工第664号

非同期式順序回路の論理合成に関する研究

小栗 謙：工第665号

非沸騰系原子炉のデジタル制御系の構成に関する研究

昭和53年10月31日付授与者

工学博士

白石昌武：工第666号

施削加工における工作物寸法の測定とその応用に関する研究

昭和53年11月30日付授与者

理学博士

藤井恒男：理第154号

The Theoretical and Experimental Studies of Some Excited Molecules

北原武治：理第155号

放線菌の生産する新抗生物質に関する研究

高久 洋：理第156号

オリゴヌクレオチドの化学合成における縮合剤とリン酸の保護基に関する研究

工学博士

稲垣勝彦：工第667号

織物の光沢に関する研究

坂 高芳：工第668号

噴霧乾燥法による揮発性香料物質のマイクロカプセル化に関する研究

中村隆一：工第669号

オレフィンの不均化反応に関する基礎的研究とその応用について

武田力也：工第670号

翼車形流速計の特性に関する研究

田坂英紀：工第671号

都市走行条件における自動車用四サイクル火花点火機関のガス交換に関する研究

戸恒 明：工第672号

二相サーボモータの振動トルク特性と回転子振動の軽減に関する研究

神戸 宏：工第673号

光伝送用低雑音・高速APDの設計に関する研究

桑原尚夫：工第674号

連続音声認識のための言語音知覚の基礎的研究

白木健一：工第675号

レーザー発振用酸化物単結晶の育成に関する研究

昭和53年12月31日付授与者

理学博士

遠藤三郎：理第157号

光導電性半導体 cdIn_2S_4 の輸送現象と光学的性質に関する研究

中西八郎：理第158号

ジオレフィン化合物の光固相反応に関する結晶学的研究

工学博士

野呂瀬進：工第676号

凝着摩耗における摩擦面相互作用に関する研究

河内正夫：工第677号

混合コレステリック相液晶の電気光学的効果

中西賢二：工第678号

The Numerical Calculation Method for Predicting the Flow Curves of Polycrystalline Metals and Alloys and its Application to the Analysis of the Plastic Forming Processes

笹野久興：工第679号

強力チタン合金の機械的性質におよぼす金属組織学的因子の研究

昭和54年1月31日付授与者

工学博士

鈴木英雄：工第680号

広帯域通話路スイッチの設計に関する研究

舟久保登：工第681号

印刷文字認識システムにおける空間回路網に関する研究

高橋貞夫：工第682号

弾性表面波フィルタ及びその周辺回路の設計に関する研究

鈴木信雄：工第683号

ミリ波帯域分割用分波器の研究

笹川 明：工第684号

鋼管はり接合部および柱継手の強度・剛性に関する研究

高田信久：工第685号

気体中におけるアルカリ金属イオン移動度に関する研究

柴田 守：工第686号

Mechanic and Metallography Studies of Phase Transformation and Decohesion

土岐政弘：工第687号

水晶振動の等価回路定数の測定法に関する研究

昭和54年2月28日付授与者

理学博士

小林 忠：理第159号

Entire Functions with Three Linearly Distributed Values

阪本邦夫：理第160号

Planar Geodesic Immersions

山本直紀：理第161号

強誘電強弾性体 $\text{Gd}_2(\text{MoO}_4)_3$ の電子光学的研究

工学博士

宮地博文：工第688号

17クロムステンレス鋼の集合組織制御に関する研究

大村芳正：工第689号

時計用小形円形平板状 Rb 板水晶振動子の開発

倉持内武：工第690号

Rb原子発振器用ポンピング光源の分光的特

性に関する研究

増田弘生：工第691号

短チャンネルMOSデバイスの設計に関する研究

昭和54年3月31日付授与者

理学博士

和田 雄：理第162号

モリブデン原子核による重陽子の弾性および非弾性散乱の実験的研究

石原秀晴：工第163号

ケイ素およびセレンを用いる有機合成反応に関する研究

小宮山トモ子：理第164号

An Application of Luminescence Spectroscopy to Some Prominent Chromophores

竹内刃雄：理第165号

降水中の化学成分濃度の時間的・空間的变化とその要因

椎野正寿：理第166号

EUSにおける動的臨界現象の高周波磁率測定による研究

伊藤 茂：理第167号

Functional Analysis in the Theory of Fixed Points and Random Equations

日合文雄：理第168号

Theory of Conditional Expectations and Information Channels

木村純二：理第169号

ヌクレオシド糖水酸基の活性化による合成反応

昭和54年度

学内職場対抗囲碁大会

庶務部人事課

本年度の学内職場対抗囲碁大会は、2月2日(土)午後12時40分から工学部本館2階27号会議室において開催されました。

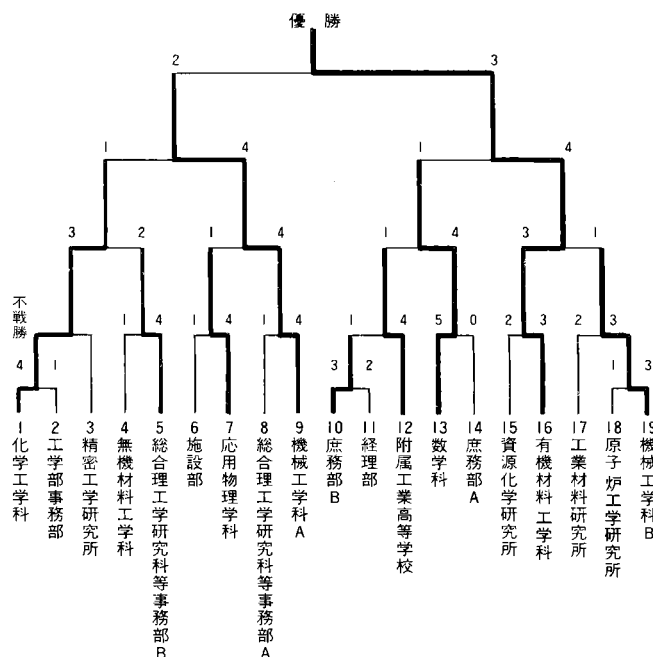
今回は昨年度より参加チームも増えて熱戦となり、各試合で好手合が続出しました。

また、本大会の運営にあたっては、職員囲碁部の皆様の御協力によって、盛況のうちに終了することができましたことを深く感謝します。

なお、囲碁大会の結果は、次のとおりとなりましたので、お知らせします。



学内職場対抗囲碁大会組合せ表



教官寄贈図書紹介（その21）

〔寄贈者名〕

力武常次（教 授）：地震予知，地球磁場とその逆
転，海域地震，宏観異常と地震

関口利男（教 授）：電波工学，電磁波，場の工学

沼澤治治（教 授）：集英社世界文学全集第76巻

斎藤安俊（教 授）：基礎金属材料

野沢豊古（名誉教授）：線形代数の方法

（故）河上益夫（名誉教授）：河上益夫論文集

（故）和田小六（名誉教授）：TVA原書第二版

以上の図書が図書館に寄贈された。

編集後記

寒い冬も去り，桜のつばみもふくらんで，日毎に春らしくなってきました。

春3月は自然界と同様に，また人の移り変わるときでもあります。

永年にわたり，本学の教育・研究に尽力してこられた14名の先生方が，今年も本学を去ってゆかれます。

在任中のご苦勞に対し心から感謝申し上げるとともに，今後のご活躍とご健康をお祈り致します。

“留別”とは，広辞苑によれば「旅立つ人があとに留まる人に別れを告げること」とあります。

諸先生の“留別の記”をご愛読下さい。

東京工大クロニクル No.122

昭和55年3月21日

東京工業大学広報委員会 発行©

東京都目黒区大岡山2-12-1

Tel. (726) 1111 内線 2032
